
H & S F

しゃヴえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H&SF

【Nコード】

N2889S

【作者名】

しゃヴえ

【あらすじ】

夏。主人公は肝試しをすることとなった。

場所は最近行方不明者が立て続けに出た 山。

何故そんなところで肝試しをと主人公は思いながらも、参加することにした。

又工編（前書き）

だいが昔に書いたものです……

（傷詠みよりもっと昔だったと思います）

なんとなく、公開……

又工編

まただ。・・・山のニュースが流れる。アナウンサーが淡々と事件を語る。

テレビに行方不明者の写真が映る。当たり前だがどれも知らない顔だ。

行方不明者の五名が高齢者でいかにも私は山が大好きですとでも言いたい感じの顔である。

残り一名が警察の関係者である。

俺は思い出す。この集団失踪事件が発覚してからこれで一ヶ月近くとなることを。

「七時三十分です。おはよう。おはよう」

テレビが七時三十分を告げる。そろそろ学校に行かなきゃな。制服を着て俺は家を出た。

教室に着くと同時に友人のタナカが話しかけてきた。

「リヨウスケ。今夜、・・・山で肝試しするんだけど来ないか？人数が足りないんだよ」

リヨウスケは俺の名だ。俺は窓の外を見る。朝日が昇る。

今は夏である。梅雨が明け、まぶしい太陽がサンサンと輝く季節である。

さらに言えば肝試しをするには絶好な季節である。しかしなんで・・・山なのかわからなかった。

「別にいいけどなんで・・・山なんだ？」

「噂を知らないのか？呪いとか幽霊の仕業っていわれてるんだぜ？聞いたことあるだろ。」

妖怪やら幽霊の仕業といった下らない噂が流れてる。もちろん知っている。ただ、・・・山がなんでいきなり心霊スポットになった

のかがわからない。何故だ？

「この前テレビでもやってたぜ。ここは邪悪な気配がします…ってな」

なるほど。テレビか。なるほどなるほど。

「撮影中に照明も急に切れてな、本当に何かいるって感じちゃったぜ。俺はびびっちゃったよ」

頂上には神社があつてな。その神社の屋根に黒くて

大きなものがうつつたとたん何かいるって霊能力者が走って逃げたんだぜ」

タナカは自分がどれだけ驚いたか説明していた。熱いね。ホットだ。

「どうせヤラセだよ。テレビは便利だが、たまにくだらないものまで流すからな。鵜呑みにするなよ」

俺は冷静に忠告する。だがタナカは聞く耳を持たない。黒くて大きなものね…。正直うそくさい。

「しかしだな、こりゃ肝試しするしかないじゃん。近場に心霊スポットができたんだからな。」

とにかく今日の夜九時に…。山のふもとの売店に集合だ。懐中電灯は俺が持つてくる。

じゃあまた後で」

タナカはそういつて席を離れた。

今夜九時、…。山のふもとの売店で待ち合わせ、ね。

くだらないと思いつつも行って見たいという気持ちはあった。

警察関係者まで行方不明になるなんて普通ありえない。いるのは幽霊なんかじゃない。

もっと別の凶悪なものだ。俺はそう思った。

授業を消化していく。放課後になる。ただひたすら眠い。待ち合わせ時間まで学校で寝てようかなと思う。

「ねえ。今日リヨウスケたち…。山に行くの？」

俺は目を擦りながら声の元を探した。すらりとした肢体。茶髪のロングヘア。アカネだ。

「なんで知ってるの？」

俺はアカネに訊いた。

「今日朝タナカくんに言われてたじゃない」

タナカ。・・・山に肝試しをしないかと誘ってきた友人。

「・・・山には行かないほうがいいよ。絶対あの山にはおかしなものがいるから」

「おかしなものって黒くて大きい奴か？」

おれは適当に答えた。眠い。寝かせてくれ。

「知ってるならなんで行くのよ？」

意外な返答。だが眠いままだ。

「おいおい。アカネまでテレビの言ってたことを信じるのかよ？」

「テレビ？そんなの知らないわよ」

「じゃあなんで黒くて大きい奴のこと知ってるんだよ？」

「私新聞部の取材をするために・・・山に行ってきたのよ。その時・・・山に登山する人達の半分が黒くて大きい何かを見たって言ったのよ。それに行方不明者が出たときに見たって証言が多くあるのよ」

そういえばアカネって新聞部だったな。

この学校の新聞部は活動が本格的で小さな出来事から大きな事件までなんでも調べている。

毎月活動結果の結晶である新聞部新聞を作っている。内容は商業紙にも負けないパワーがある。たぶん。

「でその正体はなんだったの？」

俺はアカネに訊いた。

「黒くて大きなものとか言いようがないのよ」

「もしかしてアカネも見たの？」

アカネは黙った。そして周囲を気にしながら言った。

「私も見たの」

意外な一言。

「本当に黒くて大きなものだった。なんなんだろ。うまく説明できないけど動物なのかな…?」

「どのくらいの大きさなの?」

俺はアカネに訊いてみた。

「遠くだったからよくわからないけど虎とかライオンよりも大きいかな?」

「何時ごろ見たの?」

「もう暗くなるって時だから六時半以降かな」

「なるほどね。忠告ありがとう」

「リヨウスケは行っちゃうの?」

「もう放課後でタナカはいないから今更行かないとは言えないし伝えられないだろ」

「気をつけてね」

アカネは心配そうに言った。黒くて大きな奴はどうやらいるらしい。タナカはそれを知っているのか?

現在八時五十八分。五人全員集まった。今回の肝試しを提案したタナカもちゃんと来ている。

「この山の頂上にある神社のお賽銭入れの裏に俺の期末テストのテスト答案を五枚置いてきた。今回の肝試しは一人で神社まで行ってプリントを一枚持って帰ってくる。それだけだ。簡単だろう?」

タナカが肝試しのルールを説明する。

「順番は俺から行く。サイトウくん、ジュンちゃん、まっちゃん、リヨウスケの順で行くことでいいかな?」

「いいぞ。とサイトウくんとジュンちゃん、まっちゃんが言った。

「それじゃあ行ってくる。」

闇の中、タナカの持つ懐中電灯の灯りがぼつんと光る。そして見えなくなった。

だいぶ時間がたってからタナカがテスト答案をひらひらさせなが

ら帰ってきた。現在九時半近く。

「待たせたね。次はサイトウくんだよ。」

サイトウは懐中電灯をタナカに渡され闇の斜面を登っていった。

サイトウが上っていつてから一時間がたった。現在十時半。サイトウはまだ帰ってこない。

「待つても時間の無駄だな。タナカ、行ってくるわ」

ジュンちゃんは懐中電灯もなしに斜面を登りにいった。この肝試しをくだらないと言ったがさすがに灯りなしで行くなんて普通じゃない、と思った。

「タナカ。俺もちょっと時間を空けてから上っちゃうわ。」

ジュンちゃんを待つてたら深夜になっちゃう。深夜になったら帰るのがつらくなるからな」

十時四十五分。まっちゃんが登って行った。そしてタナカと俺の二人だけになってしまった。

「それにしてもサイトウはまだ帰ってこないのか？さすがに時間がかかりすぎだろ。」

「おいリヨウスケ。まだ気付かないのか？俺が頂上まで行って下りてくるのにあんなに早く帰ってこれるわけないだろ。」

タナカがそう言った。しかしタナカの口にした言葉の意味がわからない。

あんなに早く帰ってこれるわけないだろ？まさか。

「タナカ、お前頂上まで登ってないのか！？」声が闇に響いた。

「そうだよ。やっと気付いてくれた」笑いながら田中が言った。

「このプリントは頂上においてある奴じゃなくて、俺のポケットの中にあつた奴だよ。」

だからちよつと登ったところで時間を潰して降りてきたんだ。」

「リヨウスケは登らなくていいよ。友達なもの。でもあいつらは違う。友達なんかじゃない。」

タナカは静かな声でそつと言った。

「行くのは勝手だけど何があつても知らないよ。ここは邪悪な気配がして危ないんだよ。」

タナカの顔が酷く歪む。笑っている。それも特上の笑いだ。タナカは化け物みたいな顔になっている。

「タナカ、お前も来い。まだ帰つてきてないサイトウたちを探すぞ。」

「俺は行かないよ。もう帰るから。行くなら一人で行って。リヨウスケは友達だけで行きたいのなら止めないよ。もう俺達が知っている山じゃないんだよ。ここは。」

「タナカが行かないのなら仕方がない」

「…よかつたよりリヨウスケ。キミまで悪い奴にやられるところだったよ」

「違う。俺一人で行く。タナカは帰るなり何なりとするがいい。俺はサイトウたちを探しに行く」

やめたほうがいいのに。田中の声が耳の後ろに響く。

俺は斜面を登り始めた。緩やかな道なので頂上に着くまでにかなりの時間が必要だろうと考えた。

ゆっくりゆっくり闇に目を凝らしながら先に進む。

山を包む木々たちはひっそりとしていてたまに葉の擦れるかさかさという音をたてる。

曲がり道を進み、降り道を降り、登り道を登り、先の道に目を凝らし進んでいった。

その時、遠くにぼんやりと灯りが見えた。サイトウかもしれない。俺は駆け足で登って行った。

灯りに近づく。道のと真ん中に懐中電灯がついたまま落ちていたのだ。見えた明かりはこれだろう。

でも懐中電灯を渡されたサイトウの姿がない。次の順番のジュンちゃんもこれを見たのだろうか。

落ちている懐中電灯を持って降りようとしたんじゃないだろうか。

サイトウが消えたと言いに。

ジュンちゃんがそれを持って降りようとする。そこでサイトウの身に起きた何かと同じことが起きる

ジュンちゃんも消える。そしてまっちゃんも懐中電灯を見てサイトウとジュンちゃんが消えた事を感じる。

そして懐中電灯を持ち、降りようとする。サイトウとジュンちゃんが消えたと言いに。

しかしサイトウの身に起きた何かと同じことがまっちゃんにも起きて消えてしまう。

・・・山集団失踪事件。新たな犠牲者が三名増えた。

懐中電灯を持つとしたその時懐中電灯の光りの先に黒くモゾモゾしたものが身を潜めこちらを見ていた。

大きな人間の顔だった。

「探し物はこれですか？」

顔面が口をあけた。中には咀嚼されてグチャグチャになったまっちゃんがいた。・

この山から逃げないと食われてしまう。巨大な顔に。

俺は走った。後ろからドッドドッドと重く響く軽快な足音が追ってくる。

「探し物はこれですか？」

後ろから生暖かい息がかかる。足音がだんだん近づく。

「探し物はこれですか？」

耳の裏から聞こえてくる。ダメだ逃げられない！！

足が突っかかる。俺は斜面に転んだ。

「探し物はこれですか？」

巨大な顔面が上から覗いてくる。もうダメだ。俺はこの顔面に食われてしまう。

「探し物はこれですか？」顔面が口をあける。俺の頭に歯を当てる。

齧られる。

「痛い」

痛い？何が痛いんだ？顔面が俺の頭を離す。俺はこの隙に立ち上がろうとしたが腰が抜けて立てなかった。

顔面が後ろを振り返る。巨大顔面の体は黒い毛に覆われた熊か虎みたいな姿だった。

四足でのしのしと後ろにまわる。顔面の向いた向こう側には赤のマントを羽織った人がいた。

赤マントの人は奇妙な刀を巨大顔面に向かって構えている。

「痛い！痛い！痛い！」顔面が吠える。

巨大顔面が跳びかかる。

女の子が刀を構え、そして顔面を切り裂いた。顔面の目から涙が流れる。

「痛いよおう！痛いよおう！痛いよおう…」毛むくじやら顔面が嘔吐する。

巨大顔面が吐いた中にはニュースで見た行方不明者が何人も確認できた。

ただ消化途中なのか、とても見れたものじゃなかった。

その中には咀嚼されバラバラになったサイトウくん、ジュンちゃん、まっちゃんの姿を確認できた。

やはり巨大顔面に襲われたのだ。

「ハッ！」

赤マントは気合を入れて刀を振り落とす。毛むくじやら顔面の首が切れてずれ落ちた。

そして刀を鞘に収めこちらに向かってくる。

「そこのお前。このことは絶対に他の者に言っではいけないよ。お前の危機は去った。もう帰るといい」

「ちょっと待って。こいつは一体何なんだ？こんな生物見たことがない」

赤マントの人は眉間にしわを寄せる。

「又エだよ」

「又エ？一体何なんだい？」

女の子はため息をつく。

「教えるから聞いたらすぐに帰れ。そして今、命があることをありがたく思え。」

あれはと赤マントの人は言った。

「あれは妖怪だよ」

「なんで妖怪と戦うの？危ないんじゃないの？」

「私も妖怪みたいなものだからさ」

「でも悪い奴には見えないよ」

「質問はもういいかい？早く帰れ。私が青じゃなくてよかったな。」

「青？」

「こつちの話だ。気にするな」

「最後に一ついいかな？」

「なんだ？」

「君の名前は？」

「…赤だ。血の赤。太陽の赤。とにかく私の名は赤だ」

「助けてくれてありがとう。絶対忘れないよ」

「勝手にしろ。さあ早く帰れ。真夜中はお前たち人間のための時間ではない。」

俺は・・・山から出られた。きっとタナカは又エのことを知ってたんだな。助けてくれた赤って人、強かったな。…早く家に帰ろう。そして明日今日あったことをタナカに話してみよう。

「ははは、今日は楽しかったな。今頃あいつらは黒い奴に食われちゃまってるに違いない。」

ああ愉快愉快。」

リヨウスケくんは惜しい人だったけどしょうがないな。黒い何かからは絶対に逃げられない。

かわいそうに。明日からはリヨウスケくんの分まで生きるぞ!!

窓の外側でドンと音がした。

「なんだ？」タナカは窓を開けた。

「探し物はこれですか？」

巨大な顔面が窓いっぱい広がっていた。それを見たタナカは気絶した。

又エはタナカを頼むと咀嚼し住処である……山に戻っていった。

失踪事件は急展開を見せた。……山中腹で失踪した人々の遺体が発見されたのだ。

発見された遺体は全部で九体。どれもバラバラで腐乱していたらしい。

俺は……山で遭遇した怪物と、赤マントを羽織った赤という名の人を思い出した。

学校に行く。田中を探したが肝試し以来見ていない。

縫合人形編（前書き）

6 / 20 文を手直し。

縫合人形編

H & S F 縫合人形編

彼の作品の製作段階がついに最終段階へと変わった。

今まで集めたパーツと今日手に入るパーツがあれば作品は完成する。

美しい。左腕がなかなか良いな。この中指の反り返らせた形なんて卒倒ものだ。あと右足が良い具合だな。

女が目覚める。

「やあ、お目覚めかい？今からカットするから。え？助けて？何を言っているのかわからないよ。」

きれいに切ってあげるから安心して。大丈夫だから。はい？許してください？

だから何言ってるかわかんねえよ」僕は女の髪を掴む。右、後、左、前。

ゆっくりと準備運動をさせるかのように入念に首を回しながら男は口を開いた。

「ちよつと黙ってるよ。静かにしてないと首からきつちゃうよ。」

僕はそんなことしたくないの。カットしたいのは君の左腕と右足を少し。君の頭は要らないから。まあ一応パーツボックスに入れるけどね。「髪から手を離す。」

カットが始まる。左腕と肩の間にナイフを差し込む。女は悲鳴を上げる。

彼にナイフを持たせたら解体できないものはない。そこからついた名前がリップマン。

リップマンはすばやく左腕を肩から切り離した。左腕を丁寧に洗い、舌でなめる。

次は右足だ。リップマンはナイフから斧の様な中華包丁のような幅広のナイフで大胆に腿を斬った。

大腿骨が折れて右足を胴体から切り離す。

「うん。左腕の切り口はオツケー。あらら、右足の縫合が難しそうだな。使えるかな？ まあいい。さて、後はキレイに全部カットしますか。ほら、君がたのんだカットだよ」

女は耐え難い痛みを受け、気絶していた。

「あらあら、寝ちゃってるよ。…まあいいや。全部カットを始めましょうか」

女の体はバラバラに切り取られ、パーツボックスに入れられた。

男はパーツボックスから逸品となるパーツを探す。

「顔はこの子にしよう。胴体はこの子だけじゃ不足している点があるから違う子から貰ってくつつけよう。右腕はさっき斬った子にしよう。右腕はこの前コレクションに入れた奴を使おう。右足はさっき斬った子の奴で、寸足らずだから他のコレクションから少し拝借しよう。左足はコレクションの中から出そう。」

そろえたパーツをステンレス台に広げる。ここからが俺の腕の見せ所だ。

パーツは右腕、左腕、頭部、胴体二つ、右足、右足修復用肉、左足となる。

リップマンが縫合セットが入ったジエラルミンケースを持ってきた。

「さて、縫合作業に移りますか。」

リップマンは糸を通した針を持ちバラバラになっているパーツを一つの完璧な人間に仕上げるのだ。

これで私の作品、『完璧な人形』ができた。

縫合し終った人形に服を着せ立たせて抱くと、リップマンは踊り始めた。もちろん肉人形は踊らない。

でもリップマンは肉人形と踊る。動かなくても喋らなくてもそんなことでは落ち込まない。

ただ自身のエンバールミングの力不足のせいか肉人形は徐々に腐り始めることが許せないことである。

「腐らないように出来ないものか…」

リップマンは今まで何十体もの肉人形を作り上げてきた。

でも肉は腐っていき、その度に毎回肉人形の処理を考えた。

いまだに最高傑作と呼べるものが作られていない。腐る事のない肢体、笑顔が眩しい、そして俺の名をいつか言ってくれる日待っている。

次の日、肉人形を作る作業室に入ると昨日作った肉人形がふらふらと立っていた。

そして歩いて私の所まで来た。

「・・・さん。私の体を返して」

余りの驚きにリップマンはしばらく動くことのできなかった。だが、よたよたと歩き、近づく彼女を見て、喜び、涙を流し、駆け寄り、肩を抱いた。

と同時に解体用のナイフが腹に突き立っていた。だがリップマンは笑い続ける。

「はははははは。肉人形が動くだけでもすごいのに、人を殺す意思まで備わっているんだ、感動だよ」

肉人形は何度もリップマンの腹を刺した。それでも男は笑い続ける。

男は笑いながら、彼女の目をじっと見つめながら、崩れるように倒れる。

倒れたリップマンは口元を引きつらせ、笑い声をあげる。そして、止まった。

「私の身体を返して…」

肉人形はパーツボックスをひっくり返し、自分の体のパーツを探

し始めた。

*

「赤、ここから北東に怨霊の気配。とても強い気だ」

ビルの屋上、フェンスに座る二人の少女。紫色のマントに身を包んだ少女が、赤色マントの少女にそう言った。二人のマントが風にはためいている。

「青は教室に閉じ込められたから出れないと言っている。多分苦戦しているのだろう」

「ということは私かあなたが青の援護に行かなきゃならないということね」

赤は紫マントの女の子に言った。紫マントの女の子の名前は多分、紫であろう。

「私が青の援護に向かう。北東の怨霊は赤に任せるよ」

「そう、わかったわ。お互いの無事を祈りましょう」

「そうね」紫は頷く。紫はフェンスの上に立ち、飛び降りた。赤もそれに続く。

誰もいない真夜中の街に二人は降り立つ。

「じゃあ私は青の元に向かう。それが終わったらそっちの増援に向かうわ」

「いらないわ。でもお願いね」

着地と同時に二人は別れた。

赤は北東から感じる怨霊の気配を元に走る。障害物はなるべく飛び越え、無理なら回避して先を目指した。私の走っている姿を人間たちが目撃すれば多分「音速赤女」という都市伝説が出来てしまうだろうと思った。

それほど速く私は走れる。まあ人間じゃないから当たり前といったら当たり前なのだけれど。と、赤は思い自嘲気味に笑った。

私は青と紫に比べ頑丈に作られている。

青や紫の持つような力は私にはないが、単純な力であれば誰よりも持っている。

まあそんなことは今はいいか、と呟き、赤は北東へ走り続けた。

そして、気配がする場所に着いた。看板には***と書いてある。どうやら美容院のようだ。

この建物の中から嘆く魂を感じた。扉を開ける。鍵がかかっていたが赤は気にせず扉を開けた。

鍵が壊れる。このぐらいのことなら朝飯前だ。なぜなら私は人間じゃないから。

中からは沢山の魂が行き場を失って漂っていた。酷い。赤は思わず言葉を声を出してしまった。

魂はみんな自分の身体を捜しているようだった。

赤は下から湧き上がる死の匂いに導かれ地下室に向かった。

人が座って何かを探している。だが様子がおかしい。

回りには解体されたと思われる腕や足が散乱していた。

「私の身体を返して。私の身体を返して」

全身に縫合の跡がある女が散らかった肉体の欠片を手にとってはじつと眺め、放る。

女が私に気がつく。

「あなたは誰、私の身体を知らない？」

そう言つて女はゆらりと立ち上がる。プツプツと糸の切れる音を立てながら。

「お前は何者だ？ 全身の縫合跡から見て人間じゃない…… よな？」

「人間じゃない？ 私は人じゃないの？」

「お前はもう人間ではない。解放されたいのなら私が解放してやるが」

縫合女は一度目を閉じる。次に細く薄く開いた。黒色の瞳の中に

私の姿が映っていた。

「解放の意味がわからない。私は自分の身体を取り戻したいだけ」
縫合女の体からは数体の魂の匂いがする。

「残念なことを言うようだが君の身体は見つからない。君たちは自分のパーツの判別が出来ないのと同時にそれを元に戻せる者がいない。右手が胴体1を求めても左手は胴体2を求め。徒労だ。我の持つアッシャーでお前たちの苦しみを解放してやれるのだが、どうだ？」

アッシャーとは赤の持つ奇妙な形状の刀のことだ。

この部屋の気が変わる。縫合女から流れ出る気が色を帯び赤の身体に重くまとわりついていく。

「面倒だな」

赤は奇妙な刀、アッシャーを縫合人形に向けて構える。

縫合女の回りの肉の欠片、つまりはカットされた腕や足が宙に浮く。

少しの間。長い間。

宙に浮いた腕や足がブルリと動きだす。その刹那、赤に襲いかかる。

赤はアッシャーでそれらを払い落とす。

縫合女が立ち上がるとさらに腕や足、頭部、胴体が宙に浮く。そして次から次へと赤へ。

赤はアッシャーで払い落とそうするが、先ほど払い落した腕が赤の足を掴んで虚を突かれる。

あ、と思う間もなく、赤は飛んできた肉片に突き飛ばされた。

アッシャーでなぎ払いたいのだが足を掴む腕が邪魔をする。それを対処しようとする

欠片が突っ込んでくる。

徒労だ。

縫合女が笑う。きれいな笑顔だ。普通なら鬼のような顔をするも

のだと思っていたのだが。と赤は冷静に女を観察する。

赤はアツシヤーの力を解放させた。刀から炎が舞い上がる。アツシヤーは赤に鈍く光り始めた。

「解放してやるよ。縫合女」

足を掴む腕に刀を突き立てる。腕は瞬時に灰に還った。

アツシヤーを構えなおす。

大小様々の肉片が飛来。それらをアツシヤーで灰に還し、赤は跳躍。縫合女へ近づいていく。

アツシヤーを振りかぶる。赤の華奢な骨格が悲鳴を上げる。

振り下ろす。右肩からするりと刃が入り、ゴキゴキと音を立てながら縫合女の胸を切り進んだ。

赤は手を止め、合図をするかのようにアツシヤーの刀身を指で撫でる。

解放されたアツシヤーは縫合女の肉体と靈魂を食い始めた。

「私の大切な身体」と縫合女は声を漏らす。

縫合女はアツシヤーに食われながらもまだ自分の体を捜し続けた。いた。

赤はアツシヤーから手を離し、部屋の奥、倒れている男のもとに向かった。

「哀れなものだ。作り手は殺されたか」

赤はそう呟き、倒れている男を調べ始めた。

どうやらここ、カット&パーマ***の主人のようだ。

赤は男の腰にあった鍵束を奪い、部屋の奥へと進んでいく。

地下室はいくつもあったので全て見て回った。ある部屋には腐敗した縫合女が並ぶ部屋があった。腐敗臭が赤の鼻を突く。

赤はここに魂が漂っていた理由を理解した。さつきみた死んだ男の仕業に違いがあった。

アツシヤーの回収に行く。アツシヤーは縫合女のほとんどを飲み込んでいた。

アツシャーを手に握り、一振り。刀身から色が失せる。
また一つアツシャーの力をあげる事が出来た。と赤は笑い、建物
に火をつけた。

翌日のニュース

・・・街の美容院、***で火災が発生。オーナー一人が死亡。
他にも複数の不可解な遺体が発見された。

手がかりは今のところ何もなく、何故火災が発生したのか。放火
の線で現在調査中である。

恋するポスト編

恋するポスト編

私とシヨウイチ君の二人はとても仲がよい。学年で一番羨ましいカップルといわれるほどだ。

そんな愛し合う二人は両家の厳しい掟のため、学校以外でなかなか会うことが出来なかった。

そんな二人は色々考えて、合えない時間を文通で補う事になったのだ。

古風な感じがするがそれが一番の策と私とシヨウイチ君は考えた。私はポストに一日一通ずつ、この手紙がシヨウイチ君の元に届きますように。いい返事が来ますように。

と呟きポストに入れた。おまじないのつもりでポストをポンポンと叩いた。

シヨウイチ君も手紙を入れた後にポンポンと頼んだぞ、という気持ちを含め、叩いた。

二人の文通生活はとても楽しいものとなった。いつも口では言えないことも手紙にするとすらすらと

言葉が生まれ、文章となり、ありのままの気持ちを手紙に込めることができた。

今日も私はいつものポストに手紙を入れる。ポンポンと軽く叩きながら。

いつものようにこの手紙がシヨウイチ君の元に届きますように。いい返事が来ますようにと祈った。

数日たって伊達君が私に言ってきた。

「最近手紙が来ないんだけど、一体どうしたんだい？」

おかしいなと思った。ちゃんと毎日手紙を書いてポストに入れて

いるのに。」

「シヨウイチ君。私ちゃんと毎日ポストに手紙を入れてるよ。」

「もう一週間近く手紙が届いて来てないぞ。」

「私、嘘なんか言ってるよ。今日学校で書いた手紙をポストに入れる所を見ればいいの？」

「疑って悪かった。クミコがそんな嘘をつくなんて考えていないよ。それでクミコの使っているポストってどこにあるの？」

「私が使うポスト？シヨウイチ君は何をする気だろう？」

「ここからすぐのところだから行ってみる？歩いて五分ぐらいだよ。」

「おう、いってみよう。」

私が使っている赤いポストの前に立つ。

「いつもこのポストを使っているのか？」

「うん。家からも近いし、学校で手紙書いたときはここを使うよ。」

「まさかとは思うがポストが手紙を届けられないようにさせているんじゃないだろうか？」

「まさか。それはないよ。だってポストだよ？」

「俺たまに靈感が強くなる時があるんだ。多分このポストが手紙を俺の元に渡らせたくないんだろ。」

「ポストは何も言わずただ立っていた。」

「このポストは多分クミコと俺の文通を成立しないようにしているんだ。」

「シユンイチが一呼吸おく。」

「クミコ、別のポストを使ってみるよ。そうすればたぶん俺の元にちゃんと届く。」

「わかったわ」

「私は頷いた。」

「ちよっと馬鹿げた話だけど、シユンイチ君の話だから信じることに。」

にする。」

「クミコ、つくも神って知っているか？」

「なにそれ、知らない。」

「作られてから長い年月が経過した道具には魂が宿るんだ。魂の宿った道具をつくも神と呼ぶんだ。」

シュンイチがポストの前に立つ。

「多分コイツはつくも神だ。なぜか俺達の文通を邪魔するつくも神。」

ポストがいつもより少し大きく見えた。シュンイチに意地張っているんだ。

「コイツは多分クミコに恋をしているみたいだな。張って来やがる。」

ポストとシュンイチが張り合っている。

「俺はお前と違って歩ける人間様だ。お前に出来るならやってみよう。」

そういった途端にシュンイチが私を抱き寄せキスしてきた。まあ私はキスが嫌いじゃないからいいけど。

目の前にポストが立っている。

赤いポストが燃える炎のような赤に変わったように見えた。

「やっぱりな。このポスト、クミコに恋しているぜ。」

「シュンイチ。もう行こう。私もポスト変えるからさ。」

私は少しだけポストがかわいそうだと思った。

シュンイチはポストの前に再び立った。

「お前にクミコは取らせない。お前は突っ立って手紙でも食ってな。」

ポストに挑発する。そしてクミコとシュンイチはお互いの家へと帰っていった。

そして次の日、学校に行く途中に例のポストがあるか見た。しかしポストはいつもの場所がない。ポストが消えている？何か嫌な予感がする。

まさかとは思いつつもポストが歩く姿を想像する。…ありえないよ。

学校についてもシュンイチの姿が見えない。クラスメイトにシュンイチの事を聞くが

誰もシュンイチが学校に来たところを見ていないらしい。同じクラスだからすぐに合えるはずなのに。

もしかしたらシュンイチは今日学校を休んだのかもしれない。

ポストの事もあり私は学校出てシュンイチの家に向かった。

ベルを鳴らす。

「タカヤマですが。」

「俊一君はまだいますか？」

「はい？シュンちゃんはもう学校に行きましたよ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

シュンイチは学校に向かったらしい。それを聞いて私はほっとして胸を撫で下ろした。

学校に行かなくちゃ。走って学校に戻る。

「こらナカモト！遅刻じゃないか。」

「すみません。」

「まあいい、早く席に座れ。」

教室を見渡す。そして気づいた。シュンイチはまだ学校に来ていない。

私は不安に襲われた。あるべき場所になかったポスト。

学校に向かったシュンイチ。しかし学校にはまだ来ていない。

一体どこにシュンイチはいるのだろう。

「先生。体調が悪いので保健室行ってきます。」

「おお、そうか、わかった。行ってきなさい。」

「ありがとうございます。」

教室を出て向かったのは消えたポストのあった場所だ。走る。走る。走る。ポストの場所に着く。ポストは元の場所にたずんでいる。

嫌な予感がした。ポスト内の手紙を回収する車が来る。郵便局員がポストを開ける。

ごろん。何かが出てきた。郵便局員が驚く。

回収袋の中には青ざめたシヨウイチがつめ込まれていたからだ。私はシヨウイチに駆け寄る。シヨウイチは冷たくなっていた。

シヨウイチは郵便局員が呼んだ救急車に運ばれる。私はシヨウイチの家族達と一緒に病院に向かった。

シヨウイチの母親はただただ泣いている。

シヨウイチは心臓麻痺でなくなつたと聞かされた。私の瞳から涙がこぼれ頬につたう。

ポストに何故入っていたかは誰にもわからなかった。

でも私はポストがシヨウイチを殺したと思った。大切なシヨウイチをポストが殺したのだ。

「私に行きます。」

「…そうか。わかった。夜も遅いし気をつけて帰るんだよ。」

シヨウイチの父親が静かに言う。

「わかりました。じゃあ…。」

病院から深夜の通りに出る。人食いポストが道の向こう側に立っていた。やや宙に浮かんでいる。

シヨウイチを殺した。大切なシヨウイチをポストは殺した。憎むべき相手。

怒りが体中から湧き上がる。ポストに向かって歩く。

「待て、戦うのは私の仕事だ。」

後ろから女の声が聞こえた。振り返ると奇妙な刀を持ち、青のマ

ントを着た女の子が立っていた。

最初は刀がおもちゃに見えた。しかし鈍く光る刃は本物と感じさせた。

「誰よあなた！関係ないでしょ！私はシヨウイチを殺したポストを倒すんだから！」

「お前じゃ倒すどころか傷一つ付ける事は出来ないだろう。いいから下がってろ。」

さっきも言った通りこれは私の仕事だ。君みたいな人間じゃ逆に反撃にあつて殺されるのがオチだ。」

君みたいな人間じゃ逆に反撃にあつて殺される？まるで自分は人間じゃないとも言いたいような感じた。

「ツクモよ。お前は人に危害を加えてしまった。その罪は死よりも重い。ツクモよ、貴様は我がアツェルトの錆びになるがいい。」

ポストが奇怪な音で吠えた。ガラスを引つ掻くような音だった。そしてものすごい速さでこちらに向かってくる。

女の子が奇妙な刀を構えマントを翻し、ポストに向かって走り、それと同時に刀を振る。

ポストは十字に斬られ、ぐしゃぐしゃに切られた紙屑が血のように宙に舞った。

それはクミコがシヨウイチに送った手紙であった。

人食いポストは細かく砂のように崩れ、風に乗って消えていった。シヨウイチに渡る事のなかった手紙が紙ふぶきのように空高く舞い、そして見えなくなっていた。

たぶん天国のシヨウイチの元に天使が届けに行つたんだと私は思った。

「はっ！下らない。ツクモの癖にでしゃばりやがって。まあいいじゃあな。」

女の子は立ち去ろうとする。私は何か言わなければならないと感じた。

「あ、あの。ありがとう。」私が言葉を口に出す。

女の子が振り返る。

「…気をつける。真夜中はお前たち人間のための時間じゃない。」
そう言うと女の子は闇の中に溶けて消えていった。

昔、学校に行く通りにポストがあった。人間の女の子に恋をし、
その女の子の恋人を殺し、

最後は青マントを羽織った女に切り裂かれた哀れなツクモ神。
シヨウイチにはもう会えない。でも想いを伝える事は出来る。
細かく切った手紙を風に乗せると天に向かって行くんだ。

天国のシヨウイチに想いを伝える。シヨウイチを、真夜中に助け
てくれた青マント女の子を忘れないために。

赤マント編(前書き)

7 / 30 文章修正第一回目。

赤マント編

赤マント編

静まり返った深夜の繁華街。腐敗臭漂うその裏道街灯の下。

そこに赤と紫の異形二つ。紫の外套を羽織るは小柄な少女。手にはSの字に曲がった奇妙な刀を持ち、眼前の赤色のマントの男を睨みつける。対して赤マントの男はその少女、名は紫であろうその少女にさほどの興味ももていないのか、男の両目は仮面の奥から奇妙な形状の刀一点のみを見つめている。ジツとその刀を見、ときになにか思い出したのか目を細め、あれだろうか、と呟いた。

紫色の少女がゆっくりと息を吐き、吐き終えたその瞬間少女は跳んだ。少女は空を切り宙を踏み、両の手に握られた刀を振りかぶりその身を捻ると赤マントの男に向けて刀を振り下ろす。

チリン火花が散り、響くは硬音。

男の黒目が細かく震えて、少女の刀がはらわれる。

男は真横から突きを放つ。切っ先が少女の額をかすめる。ハラと前髪が散る。

後ろに背をそらし避けた少女は、そのまま刀を振るい、反撃に転じる。手ごたえを感じて目をやる。刀の上に立つ男を見つける。男はそのまま宙に跳び、紫マントの少女から離れる。

逃がすものかと少女は赤マントの男に斬りかかる。

そしてまた、チリンと火花が散る。長い事このような応酬を繰り返す二つの異形。紫のマントを身にまとった少女、仮面で顔を隠した赤マントの男。

「何故邪魔をするのか」

男が口を開く。切っ先は揺れては止まり、時計の針のように揺れて止まる。刀は下から上へと徐々に上がる。

「何故邪魔をされるのか、わからない」

赤マントの男は、深く息を吐き、歯をむき出して笑う。

「人形風情が邪魔をするな」

妙な気配を感じて、紫マントの少女は注意深く男を観察する。男の踵が地面を離れる。

一閃。

男は、少女の持つ奇妙な刀を上から下へと撫でるように斬りつけ、ツバにあたると同時に弾くように突きを放った。

しまったと思った時すでに、少女の首は貫かれていた。

「肉がなければ死なぬか」

男はそう呟くと、ゆっくりと刀を引き抜く。しかし喉から血が流れることはない。男の黒目が左右上下に震える。

紫マントの少女がすぐに反撃に出る。少女の手にする刀が紫色に輝き始める。

「淀む」

男はそう呟き切っ先を少女の持つ刀に進ませる。ゆっくりと、しかし目に留まらぬ速度で。

男の刀が少女の刀に触れた瞬間閃光。裏路地に白が拡がる。

「捕らわれんよ」

男の声。

「捉える」

少女の声。

黒が戻ると赤マントの男は消えていた。裏路地には紫色の少女が一人立っていた。

少女は傷の具合を確認するように首に空いた穴に触れ、男の消えた方角を睨む。その後、辺り見回し、その惨状に眉を潜める。

男が去った後には、大小さまざまの、肉片。

逃がすものか。そう呟き少女は雑居ビルの屋上へと跳躍。

裏路地から、少女は消える。

それから、数時間後。

赤に彩られた**橋下で赤マントの男は青色のマントの少女と対峙していた。

「観念しろよ」

青色の少女はニイと笑って、男に斬りかかる。男は眼球を忙しく動かして、少女の動きに注視。

青色の刀が上へと縦に一閃。男は避ける事が出来ず肩の肉が削がれた。柄に手をやろうとするが男の手は蹴り飛ばされて握る事すら出来ない。貯めに入った少女を見て、男はどうしたものかと考えるが、少女は瞬時に刀を振り落とす。地に打たれた刀の上に歩みを進める。少女の刀はほのかに輝き始めたのを見て、先の人形と同じモノを使っている事に気付いた。

青色少女は刀の上に立つ赤マントの男に驚く様子もなく、そのまま刀を振り上げる。男はそのまま宙へ跳んで避けるが、青色少女の放った奇妙な刀によって胸を打たれ落とされる。

着地して、男は胸に手をやる。そこには血の代わりに黒い霧が漏れていた。男は刀を抜こうとするが、嵐の如き少女の手数によって出来ず、先の人形より慣れていると男は思った。

そして何故邪魔をするのかと疑問が浮ぶ。

「何故邪魔をする」

「集めたもん、よこせよ」

そう言っただけ少女は唇の上で舌を躍らせながら刀を振る。男は首を捻り、集めた物とはなんかと問う。青色少女の瞳が爛々と輝き出す。唇を舐めて「たまだ」と笑う。その間も青色少女は刀が男の身を少しずつ裂いていく。

「たまとは、魂か」

その間に青色少女は両目を見開いて「そうだ」と答える。

男の目がピタリと止めて、迫る刀身をその目に映す。少女の刀は青白く輝き揺らめき、男はようやく理解した。

青色少女は男の腕を落として笑い、一歩後ろに退く。手にする刀から青が滲み出す。

男は何か納得したようで、残る左手で刀の柄を逆手に掴み、ゆっくりと縦に引き抜いていく。それよりも早く、青色少女の刀が振られる。

「詰みだ」

チリンと鳴る。

青色少女の斬撃を半分ほど抜かれた刀で受け止めて、男は口元を歪め笑う。男の眼球が再び動き出す。

「止まったな」

刀を受け止めたまま、赤マントの男は少女に歩を進める。青色少女は柄に力を込め弾き返す。

「噂は耳にしていた」

そう呟いて男の眼球がグルグルと回り出す。柄を握りなおし弧を描いて刀を抜くと、男はゆっくりと、切っ先を少女に向ける。

「私の魂が欲しいか。私が手にした魂を奪おうとするか。それは人の為か」

そう呟き、男の眼球が激しく動き始める。

「それがお前達の正義か」

赤マントの男は少女の手にする刀めがけ突きを放った。

閃光。

「永い事いるようだが、濁りがある」

チリンと音が鳴る。

光が収まると**橋下には倒れている青マントの少女。

「濁りある者に私は捕らえられんよ」

**橋下に男の声が響く。

「夜は私達の国だが、半端者に力を貸すほど優しくはない」

男の嘲笑だけがいつまでも響き渡る。

それから少しの間を置いて、深夜の住宅地に現れた赤マントの男は、そこで赤マントの少女と遭遇する。赤マントの男は少女が奇妙な刀を手に行っているのを見て、今日は邪魔がよく入ると思った。

赤マントの男の周りには、やはり、赤が散っていた。男の持つ刀は赤く濡れていた。

「よこせとは言わない。少し控えてくれ」

赤マントの少女はそう口にして、刀を構える。少女の刀が赤く燃え上がり始める。

「何故」

男の持つ刀が形を崩し歪み始める。同時に眼球も震え始める。

「淀みを残せば濁る。濁れば腐る。何故それを控えると」

男の眼球は止まることなく動き、それが激しくなるにつれ、刀の歪みが増していく。

「お前が無闇に減らすと、私達がとばっちりを受けるんだよ」

「誰から」

男の問に少女は「上から」とだけ答えた。

その言葉を耳にして男は眼球をピタリと止めて「上か」と呟く。

「上に正義はあるか」

それは絶対的に、と赤マントの少女は口にする。男は歯をむき出して笑い始める。

「絶対的にときたか、それはよい、傑作だ」

絶対の正義などない。と男が呟く。

「その絶対とやらに免じて今日は退こう」

鞘に刀を収め、赤マントの少女を見据える。男の瞳の中で黒が渦巻く。

「今この瞬間からお前達は観察対象だ。上の正義の為にこれからも魂を集めるがよい。だが……」

男はマントを翻す。

「お前達の濁りが淀みを生んだ時、私がさらいに来るのを忘れるな」
マントは赤い弧を描き円となって男の姿を隠し、風景に溶けるように消えてなくなる。

住宅街に男の笑い声が響き渡る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2889s/>

H&S F

2011年8月3日03時20分発行